
テンプレだねっ！！

戯言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレだねっ！！

【Nコード】

N2119BA

【作者名】

戯言

【あらすじ】

僕は死んで、目が覚めたら魔法世界だった。 テンプレだねっ！！

テンプレして。それよりそれは告白かい？(きりっ) (前書き)

暇潰し。

あまり過度な期待はしないでください。

テンプレ乙。それよりそれは告白かい？(きりっ

遙か遠い遠い過去……………。

僕は、死んだ。

ふと、目を開けると目から視覚情報が大量に流れ込み、目がチリチリと傷んだ。白く、光で淡く光る天井のせいだ。

「……………」

僕は寝呆け目のままベッドの敷き布団に右手をつき、右上半身を起こした後、ついで左手をついて半身を起こす。

「……………おっと」

力加減を間違えたようだ。頭が前方に振られる感覚が首を痛める。うむ、なんだか目が覚めた気がする。まあ、気のせいなんだろうけど。

……さて、と。

「僕としては願わくば、といったところか」

辺りを見回す。右、大きな窓。初夏なのか窓が開いて純白のカーテンを棚引かせる心地よい風が吹いている。ついでに少々強めの日光も部屋を照らす。

左、棚に花瓶、仕切りとしてのカーテン、引き戸。

下、ベッドに掛け布団にパジャマを着た自分の足、うん、いつも通り。

上、電気についていない蛍光灯。純白の天井。

前、5メートル先に壁、洗面台にトイレと思しきもの。

「……うむ、病院だね」

紛うことなき病院である。自分、パジャマといっても病院で着させられるパジャマ着てるし。逆に気付かない方が可笑しいね。

「ま、マジで願ってもないことだ」

僕、これでも一回死んでるしね。

「……ふふ、どこだか知らないけど劇的に楽しいところじゃないか」

一回死んで起きたら知らない場所。うん、楽しい展開だね。よくある二次創作みたいだ。ワクワクするね、こついうの。

「はてさて、鬼が出るか蛇が出るか」

僕は笑った。

それから程なくして、僕がいい加減何か起きないかな、と飽きてきた頃、（最も先程までの昂揚感は無いんだが）ついに引き戸が引かれて誰かが入ってきた。

僕はベッドの上で胡坐をかいているかんじだ。

「失礼しまー……………、あ、起きたんだ」

さて、誰が入ってきたんだとそちらを見ると、そこにはまあ、可愛い女の子が居ましたと。うん、二次創作でよくある展開だねっ！

「うん、なんだか知らないけど見知らぬ場所で寝ていてびっくりしたよ。飄々としているなんて言われるけどありゃ嘘だね」

「……………えっと、よく分かんないけど、大丈夫？」

「……………うーん、まだ頭が本調子じゃないかな」

僕の顔を心配そうに覗き込んでくる女の子を見ながら僕は笑う。そ

れにしても、僕、変わらないなあ。こんな事態で落ち着き払えるのが僕の長所だけだ。

「……………それにしてもここはどこだい？ 見るからに病院なのはわかるんだけど」

僕は今だに顔を覗き込んでくる女の子に向けて聞く。女の子は僕の言葉に神妙に頷き、ベッドの傍らにある椅子に座る。

「あのね……………、落ち着いて聞いてね？」

「……………うん？」

あれ、なんだか真面目な雰囲気。女の子は少し良いづらそつに結んだ口を開ける。

「あなた、魔法って信じる？」

……………

……………あ、テンプレだねっ！

「へえ、つまりこの世界には進んだ科学による理論的魔法があるわけだね」

「うん、ファンタジー的ではなくあくまで科学の延長で魔法が存在しているの」

「つまり科学のハイエンドに至った訳だ、この世界は」

はいどうも。なんか知らないけど魔法世界に來ちゃった僕だよ。厨二病を発症しているとは思えない女の子の口から魔法、なんて言葉が出たときには耳を疑ったけど、どうやら事実らしい。実演してくれたしね、バインドとか言っつのを。

「まあ、そんな見方も出来るね。行き過ぎた科学は魔法みたい、なんて言葉もあるし」

今日の前にいる女の子がくすり、と笑いながら言っつのを僕はにこりと笑いながら見た。

さて、ここで僕が女の子と話した内容を整理しよう。

・この世界はミッドチルダといい、ここはクラナガン郊外に存在する機動六課と呼ばれる部隊の医務室である。

・機動六課は今春、半年後に運営する新部隊である。

・ミッドチルダのほかに次元世界と言うものがあり、他の世界に行く手段がある。

・ミッドチルダは一つの政府により全国が統治され時空管理局に聖王教会と呼ばれる統治政府が存在する。

・時空管理局は司法、立法、行政、軍、警察が集約された中央集権組織であり、また軍は陸と海に分かれる。

・陸上部隊、海上部隊には確執があり、海上部隊はエリート組織である。

・機動六課は陸上部隊である。

・魔法にはベルカ式、ミッド式がある。簡単にベルカは近接、ミッドは遠距離が得意である。

・魔法を使うにはリンカーコアが必要であり、リンカーコアの魔力量がランクを大体左右させる。

最後に『あなたにはリンカーコアがあるからね、それも膨大な魔力量を誇る、ね?』とは女の子の言葉だ。はいはい、テンプレ乙。

なんて、まとめ的に整理したけど、随分面倒な世界に来てしまったみたいだ。時空管理局なんて、最たる面倒だ。だって考えてみるよ。次元世界を纏め、中央集権を完璧にしている組織だぜ? 歴史的に見ても黒いのは確実。最盛期にいる存在はあと滅びるだけ。どう

考えても面倒事が起きるのは確かだ。こんな世界に来るなんて僕も運が無いね。

「それで？ 僕は一体全体どうやってここに来たんだい？」

運はないけどどうやらこの世界には次元航空艦や次元転移ポートなんかもあるのは女の子の言葉から知っていたから、もしかしたら帰れるかも知れない。故に来方がわかればおのずと帰り方もわかるというものだ。僕は女の子の言葉に耳を傾ける。

「うーん。急に落ちてきたんだよね、あなた」

「……………は？」

「だから、この部隊の新設備とかを改修していたら急にドカン、と次元転移の予兆も、行使もなく。急に現われて、何処からの転移かも探知できずに」

……………これは困った。此方に来た方法が分からないうえ、僕がいた世界がわからないんじゃないじゃあ、帰れない。僕の様子を察したのか、女の子は僕に、

「それじゃあ、あなたの事を教えて？」

……………それは告白か何かかい？

家に帰れないらしい。テンプレだわっ！…！（前書き）

続。

過度な期待はしないでくださいね

家に帰れないらしい。テンプレだねっ！！

どーもー、未だに名前が出てこない主人公だよー。

前回の粗筋。

どうやら事情聴取的な事されるらしい。

「とういうわけで、あなたのいた世界の名前と、あなたの名前ね。どちらも必要になるから」

うむ、個人情報ですねわかります。

「あー、僕の名前は暮井奏香。女みたいな名前だけど男だから。

んで、出身世界？ は地球になるのかな？」

「えっ、地球出身なの？」

「そうだけど」

あれ？ 地球出身で何故にそんな反応されるの？

「……私も地球出身」

「……………あー」

うむ、得心いった。いやー、死んでいつの間にか生き返っていた魔法世界に同郷の人間がいるなんて僕は運が良い……………、

「ええええええええ！！！！」

僕と女の子の絶叫が医務室に響いた。

「……………まさか同郷とは」

「……………私もびつくりだよ」

ひとしきり叫んだ後に一息。僕は女の子を見る。女の子は大きな声を出したのが恥ずかしいのか、顔を赤らめていた。うん、可愛い。

「あつ、それじゃあ僕帰れるじゃん。同郷の人間がこっちに来てるんなら」

「あつ、そうだね」

可愛い女の子をひとしきり見つめた後、僕はふと言つ。彼女も気付いたのか、顔が明るくなった。

「それじゃあ、次元転移の手続きしなくちゃいけないから出身地域を教えて」

成る程、出身地域を入力しなければいけないと言うことは座標さえ特定すれば大まかな転移が出来るという事である。でも、僕故郷じや死んだことになってるよな。なら、あそこにするか。

「僕は三重県伊勢市出身だよ」

勿論嘘である。初詣に伊勢神宮に行ったから適当に言っただけ。伊勢からなら何とか帰れる距離にあるし、僕の故郷。

「うん、三重県伊勢市だね。今からデータベースで調べるから」

女の子はさすが科学のハイエンドに至った世界らしく、空中モニターを出して、英語みたいな文字を打ち込んでいく。僕は帰れることにワクワクしながらそれを見ていた。

……………が。

「あれ？」

女の子の疑問の声。

「おっかしいな」

……………。

「……………うーん」

……なんだか雲行きが怪しいんだが。

「……………見つからない」

「え……………」

「その伊勢市、データベースに存在しないんだけど……………」

僕は疲れた。

「つまり、日本の真ん中、近畿地方に三重県伊勢市があるんだね？」

「うん」

「私が住んでいる日本ではそこは伊勢市じゃなくて、〇〇町っていうんだ」

埒があかなくなってきたので日本地図で説明した。日本の大きな半島、近畿地方の伊勢市をぐるりと指で囲んで指すと、女の子の口からは聞いたこともない町の名前が出てきた。ならばと東京を指すと、

そこは海鳴とかいう港湾都市らしい。他にも歴史や音楽などの文化を聞いてみても細かいところで差異がある。

……嫌な予感がしてきたぞ。

「……………もしかしたら平行世界？」

口をついて出たのは最悪の展開。

「それならこの差異は有り得るかも……………」

いやー、さっき彼女から次元転移の話聞いたときになんだか嫌な事を聞いたような……………。

「もし、平行世界なら？」

「……………残念ながら君を元の世界に帰すことは出来ない」

ですよー。大体予想ついていたよ。

「……………なんだかなあ」

僕はもつと疲れた。

結局僕の措置は明日、ここの部隊長を呼んできて審議するらしい。彼女、自己紹介してもらったので名前を言うと高町なのはも混乱しているし、彼女自身、戦技教導官とかいうのの準備があつて忙しいらしいし。

僕は取り敢えず医務室に待機。飯もあるし、医務室から出ないようにすれば保護は確実との事なので大人しくする事に。

「……………どうなるのかねえ」

僕はどうやらリンカーコアとやらに膨大な魔力があるらしいし、元の世界に帰ることも出来ないし（もっとも、帰れた所で死んでいるので逆に帰らないほうがいいのかも）、ならば此方で何か職を見付けたほうがいいのかも。

「…ま、なんとかなるかな」

今まで適当に生きてきたんだ。今回も面倒なだけで、なんとかなるだろ。

たぬきと語り。 テンプレだねっ！？ (前書き)

続。

過度な期待はしないでください

たぬきと語り。 テンプレだねっ!?

翌日。

僕は病院服を元々来ていた服に着替えて部隊長室に高町なのはとむかっていた。 そういえば僕が何故医務室のベッドに寝ていたかという、高町なのはが僕を発見したときにバイタルが酷く下がっていたらしい。 外傷もないのに衰弱していたための処置ということだ。 うん、納得。

「そういえば高町なのは」

「何？ あ、なのはでいいよ？」

「ああ、うん。 じゃあなのは。 なのはは戦技教導官なんだよね？ それってどんなの？」

僕の質問に少し嬉しそうにするのは。

まあ、本音では質問しなくても語感で何となく予想はついているんだけど。 しかし、知らない土地に急に来たのだ。 聞いておいて損は無いし、何より他に聞きたいことがある時にその切り口になるべきがある。

「うーん、そうだね……。 戦技教導官は書いて字のごとくなんだけど、他の魔導師に戦闘技術を教える人かな。 凄く遣り甲斐のある仕事だよ」

さて、自分の仕事を誇らしげに語る彼女だが、話をしているときにどことなく表情に翳りが見えた。 ……僕には関係ないねっ！ 彼女、波乱万丈な人生送ってそうだけど、その人生は彼女のものだ。 僕が

口を挟むことじゃない。ま、興味ない、が本音かな。

「ふーん。それじゃあさ、他にも資格か何かはあるわけだ」

「そうなるかな。有名なのは執務官に査察官、後は鑑識官かな。他にはデバイス・マイスターとか技術関連やヘリ操縦等のライセンス系だね。色々あるよ」

「へえ」

成る程、資格は現実世界の警察なんかには有りそうなものや特殊なものが多いわけか。質量兵器が禁止されてるし、魔法が主流ゆえ、て感じだね。

「なら、なのは海の魔導師だね、なぜ陸の部隊に所属しているんだい？」

そして、これが一番疑問だ。昨日の話を踏まえてニュースやら新聞やらで調べてみたが、海と陸の確執はあまりにも深い。制度も違えば理念も違う。そんな中、彼女が所属する機動六課は異常とも言えるね。メンバーは生憎と彼女しか知らないけど。これはなのはから聞くしかないだろう。

「えつとね、機動六課っていうのは正式名称『遺失物管理 機動六課』なの。世界には行き過ぎた科学や自然現象で人知を越えた遺物、ロストログアが残される。それを危険になる前に管理するのが私たちの役目なの。それを私のお友達の八神はやてって人が部隊をつくって可能にして、私ともう一人のお友達のフェイトちゃんがそれに賛同して所属しているんだよ」

「……………」

なのはの言葉には声が出なかった。その八神はやての素性は知らないが、それは組織として危うい。こればかりは現状を見ないかぎりわからないけど、ね。

「あ、着いたよ」

なのはは呑気に部隊長室のドアを指差して笑う。僕はそれにあいまいな笑みを向けて、ドアを三回叩いた。

ノックの応答があったのでなのはの後について部屋に入る。入って最初に目についたのは部屋にはまだ荷物があまり無いことだ。当たり前だね。

さて、部隊長だが。応答の声となのはから聞いていた名前からも予想が付いていたが女性だった。いや、女性というよりもなのはよりもあどけなく柔和、そして小柄なせいか女の子という表現がいいかもしれない。まあ、可愛いからいいけど。

「こんにちは」

その可愛い部隊長さんは僕に笑みを浮かべる。アクセント的には関西系だね。しかし、把手付けたような笑みだね。この歳で腹芸が出来るなんて、部隊長も伊達じゃないって事か。

「こんにちはあ」

取り敢えず部隊長の挨拶に僕も軽く手を上げて応える。あ、部隊長の顔が引きつった。

「え、ええと……、さっそくやけど名前を言ってもらえるか？」

部隊長の引きつった笑みに、目一杯の笑みを心掛けて返し、僕は彼女に、

「僕の名前は暮井奏香。女みたいな名前だけど男だから、よろしくね（きらっ）」

茶目つ気たっぷりに言ってみた。うむ、部隊長のみならずなのは顔まで引きつった。

「あ、ああよろしく。それじゃ、座ってもらえるか？」

「了解」

部隊長は引きつった顔を何とか持ち直し真顔でソファを指差す。僕は指差されたソファに歩いて行き座る。部隊長は僕の後にソファに座る。なのはは僕の後ろに立った。

「さて、まず自己紹介や。うちの名前は八神はやてや。八神でもはやてでも好きに呼んでや」

「うん、よろしく部隊長さん」

「……………昨日聞いたと思うけど君への措置を発表するな？」

「どーぞどーぞ」

部隊長は微妙に顔を引きつらせて僕を見た。

「君の帰還は不可能と断定。時空管理局は君を全面的に保護。保護者は機動六課に委任、とするや」

「……………」

部隊長の言葉は概ね予想通りだった。時空管理局としては平行世界の人間は珍しい動物って事なんだろう。僕は平行世界の人間を、同じ人間には認識できないしね。

「で、君のうちでの措置やけど」

「うん」

「機動六課のフォワードとして働いてもらつ事にするから」

……………え？

「……………もう一度」

「機動六課の、フォワードとして、働いてもらう事にするから」

「マジ？」

「マジや」

なんか知らないけどいつの間にか僕の人権無視で措置が決まっていた件について。僕はそんな事聞いてないぞ。

「なんで？」

「君が転移して落ちてきたときに君の下にあった機材が壊れたんや。うちの部隊の機材のなかでも飛びきり高い奴がな。別に君のことを責めてるわけやない。でも今は部隊設立前でお金が無いんや。せやから、君には働いてもらわんことにはしょうがないねん。君には膨大な魔力があるしな」

「へえ……………」

まあ、辻褄はあってるね。けどどこことなく裏がありそうだ。多分魔力関係。

彼女としてはなんとかとしても離しがたいんだろうね。事情はわからないけど。ま、楽しいからいつか。魔法も使いたいし。

魔導師の杖を手に入れた。テンプレだねっ！？（前書き）

続。

魔導師の杖を手に入れた。テンプレだねっ!?

なんだか機動六課所属になった主人公だよー。

昨日の部隊長たぬきに借金あるから仕事しろと言われて早くも人生絶望だね。でも僕負けない。

「それじゃあ奏香くん、そこに寝てね」

「はい」

ま、あっさり負けちゃって今MRIみたいなのに乗せられてるけど。なんでも魔力量だけじゃなく得意な分野やレアスキルが無いかどうか調べるみたいだ。僕としても楽しく生きるためにも必須だと思う。だから大人しくしてる。

「それじゃ、検査始めるね」

なのはが機械のスイッチを入れると僕の乗っている台座が上に上がり、半円状の検査機器が僕の身体を往復する。

「……………」

緑の光が目にはチカチカするんだが。いや、文句は言わないよ。けどどうも緑が自己主張激しいとき、ちょっとぐらい言いたくなる。なのはの前だから言わないけど。一応命の恩人兼上司だし。

「はい、終わったよ」

緑の光についてあれこれ思っていたうちに検査終了。半円は元の場

所に戻り、台座も降下する。僕はそこから降りて計器と睨めっこしているのはと、今まで触れられなかった眼鏡の女の子のもとへと向かう。

「なんだか酷くないですか!！」

「ん、なんのことだい？」

もしかしてこの子は地の文、つまりモノローグを読んだのだろうか。ふむ、今まで存在も価値も概念も存在理由も消されていたのに不満があるらしいし、モノローグ程度なら読んでやるぜ、ということなのか？

つまり、この子は自己主張の激しい娘らしい。

「……そ、そんなことはないですけど」

あ、もじもじし始めた。そして向こうではなのはが気味が悪そうに眼鏡の女の子を見ている。そりゃ、いきなりもじもじし始めたら気持ち悪いよな。それが同僚なら尚更。僕なら良い精神外科を紹介するね。

「……シャリー……」

「は、はいっ!！」

そして眼鏡の女の子、つまりシャリオ・フィニーノにはなのはと良い外的作用があるから精神外科は必要ないようだ。だけど普通の外科は必要だね、このままじゃ。例えば整形外科とか。

「まあまあ、なのは。このままじゃ埒があかないし、僕も早く結果

を知りたいからその掲げたデバイスを下ろしなよ」

「そ、そう？ 奏香くんがそういうんならそれでいいけど」

そう言えば僕について。まだ話してないことがあったね。僕ってここに来てそんなに経っていないのになのはやシャーリーともなかが良い。これは僕の一つの才能なんだよね。別に惚れられているわけじゃない。僕は男、女構わずある一定まで仲が良くなれるんだよ。ある一定とは僕にとっての親友の境界線ラインと相手の親友のラインの間の位置だ。

難しい話だけれど、要はちよろい奴なら直ぐに親友に、身持ちの才奴なら友達以上親友以下の存在になれるということ。

これはレアスキルなんかじゃなく飄々としている性格が柔和ぼく見えているからだそうだ。これは僕の『親友』の見解だけどね。

で、そこから好意に持っていくも、嫌われていくも、親友のままにいるのも僕の自由。普通の人より人生のスタートラインが少し前っただけだかね。でも前世で僕を嫌っている人間はいなかったよ。

ま、僕の話は面白くないだろうから飛ばそうか。僕としても早く検査結果を知りたいし。

「うん、僕は気にしてないから。そんなことより検査結果の方が気になるよ」

「……そんなこと……って」

あ、シャーリーが落ち込んだ。この子面倒くさいなあ。

ま、文句をぶつくさ言いながらも検査結果を表示していくのは評価に値するけどね。

「……………はあ、表示しましたよ」

シャーリーくん、なにやら疲れているねえ。たとえそれが僕の所為だとしても謝らないし、反省もしないけど。

ま、シャーリーの事はもうどうでも良いので、表示された結果を見るところ。なのはも覗き込む。

「魔力量S、魔力変換資質は無し。レアスキルは……………」

「……………」

モニタに映る結果を見て、僕は息を飲む。何故なら、何とも僕らしいレアスキルが表示されていたからだ。

「ファントム・オブ・ファントム？ 幻術の中の幻術、て意味かな？」

なのはが言った言葉に僕は頷く。僕らしい、そのレアスキルに僕は満足だった。レアスキルがある自体珍しく、それも管理局の認知していないものなんて非常にテンプレだが、それでも嬉しいものは嬉しい。だってレアスキルだぜ？ よく分かんないが希少種だぜ？ テンション上がらざるを得ないぜ！！

「また、わけ分からないのが出ましたね。ま、こういうわけ分からないのが面白いんですけど」

そう言えばシャーリーはデバイス・マイスターらしい。彼女ら技術者としても未知の存在は楽しいのだろう。しかもそれが平行世界人なら尚更ね。

「そうだね、まだ細かいところは実技をしなくちゃ分からないけどこれなら育てがいがあるね」

「……ノリノ%

「うん、僕は気にしてないから。そんなことより検査結果の方が気になるよ」

「……そんなこと……って」

あ、シャーリーが落ち込んだ。この子面倒くさいなあ。

ま、文句をぶつくさ言いながらも検査結果を表示していくのは評価に値するけどね。

「……はあ、表示しましたよ」

シャーリーくん、なにやら疲れているねえ。たとえそれが僕の所為だとしても謝らないし、反省もしないけど。

ま、シャーリーの事はもうどうでも良いので、表示された結果を見るときしよう。なのはも覗き込む。

「魔力量S、魔力変換資質は無し。レアスキルは………」

「………」

モニタに映る結果を見て、僕は息を飲む。何故なら、何とも僕らしいレアスキルが表示されていたからだ。

「ファントム・オブ・ファントム？ 幻術の中の幻術、て意味かな

「？」

なのはが言った言葉に僕は頷く。僕らしい、そのレアスキルに僕は満足だった。レアスキルがある自体珍しく、それも管理局の認知していないものなんて非常にテンプレだが、それでも嬉しいものは嬉しい。だってレアスキルだぜ？ よく分かんないが希少種だぜ？ テンション上がらざるを得ないぜ！！

「また、わけ分からないのが出ましたね。ま、こついうわけ分からないのが面白いんですけど」

そう言えばシャーリーはデバイス・マイスターらしい。彼女ら技術者としても未知の存在は楽しいのだろう。しかもそれが平行世界人なら尚更ね。

「そうだね、まだ細かいところは実技をしなくちゃ分からないけどこれなら育てがいがあるね」

「……ノリノリだね」

そして、なのはも戦技教導官ゆえにテンションあげあげらしい。アゲポヨ、って奴かな？

「そりゃそうだよ。こんなに育てがいがあると戦技教導官になってよかったって思うもん。早速部隊開始までの訓練メニューを練らないとね」

「……………お手柔らかにー」

僕としては願わくばテンションアゲポヨ過ぎて過密スケジュールを

組まれないことを祈るのみだ。彼女は管理局の白い悪魔とか不屈の
エース・オブ・エースとか呼ばれているらしいのでこの願いは叶わ
ないかもしれない。おっかないね。

「ビシバシ行くよー！」

……………あれ？ 僕っていつ死亡フラグ立てたっけ。

結局訓練は僕の専用デバイスが出来上がるまでストレージデバイス
とアームドデバイスを使うとの事なので本格的な事はしないらしい。
それでも今日からやるとか張り切り過ぎだろ。

「……………あのー、なのはセンサー」

「ん？ どうしたの？」

僕は張りきりのあまりデバイス（インテリジェントデバイスのレイ
ジングハートという相棒らしい。敬意を表してレイ八さんと呼ぼう）
をセットアップして空中に浮いているなのは先生を呼ぶ。

「僕、いきなりデバイス渡されてもよくわからないんですけど」

「うーん、魔力を流してセットアップ、くらいしか説明できないんだけど」

「……………」

なのは先生が首を傾げるのを半目で見ながら僕は手を握る。僕の手には待機状態のデバイスが二つ。ストレージとアームだ。二つをそれぞれ使って得意な方を専用デバイスの参考にするらしい。よく分からん。

そして、一番わからないのが魔力だ。てか、魔力がわかれば苦労しねーよ、って感じである。

「……………まあ、何とかしてみるか」

未だ首を傾げているなのは先生は当てにならないので取り敢えずセットアップを試してみる事に。魔力は有るはずなので、もしかしたら出来るかも。

「……………そいじゃ、セットアップ」

出来なかったときに恥ずかしいから小声だ。しかし、僕の懸念は無駄なようで右手のストレージデバイスが反応してセットアップされた。服は何処かの軍服に、右手には魔導師の杖が機械に変わったかのような物体が。うわー、かつけえ。

「あ、出来たね。よかったよ。セットアップの仕方なんて普通は教えないし、どうしようかと不安に為っていたんだ」

なのは先生の安堵の声が聞こえるが、右から左へスルー。僕は終始
右手の魔導師の杖に目が奪われていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2119ba/>

テンプレだねっ！！

2012年1月6日21時47分発行